

■ 補足資料

基本構想を作成するにあたり、本資料の本編で表現できなかった事項について、以下に書き記す。

● グローバルとローカル それぞれの独自性と融合性

熊野古道センターは地域振興施設としての役割を持つが、そのテーマが世界遺産であることから、地域と密着したものをめざしながらも、絶えず世界規模での発想が求められることから、対極にある2つの視点をつねに意識する必要がある。

○グローバル

～特に研究保存機能に対して～

世界遺産

日本的な文化の象徴

熊野学

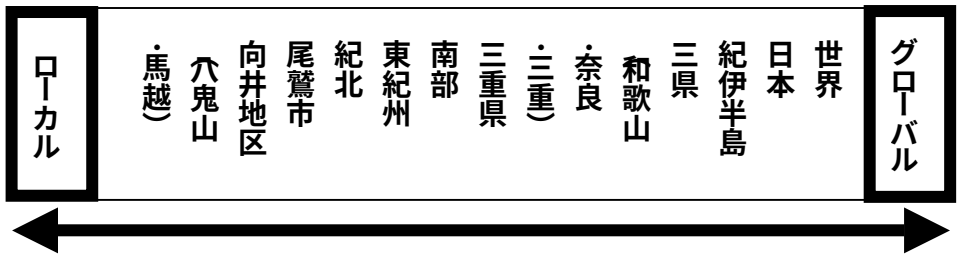
○ローカル

～特に運営と地域振興に対して～

地域住民との協働

古道歩きも含めた体験運営

観光を含めた地域振興



情報発信 : 世界遺産としての情報から地域密着のものまで

運営 : 常に世界的な視点を持ちながらも地域特性を重視した運営

学術研究 : グローバルな視点を重視し、専門家での徹底的な検討

地域振興 : 観光や産業振興施策は、より具体的な住民との構築

建物 : 世界的な質を持ち、地元素材の使用や景観を重視したデザイン

● みえ熊野学とは

東紀州地域のあらゆる分野の事象、歴史学、文学、民俗学（民話、祭り、伝承、神話、鬼）、民族学、考古学、言語学、宗教学（修験道、神学）、社会学、生物学（動物、植物）、海洋水産学、地理学、土壌地質学、環境学、生態学、デザイン学（自然景観、まちなみ、農村景観等）、気象学、土木建築学（猪垣、石畳、石垣、歴史的建造物等）、観光学などを対象に、古くから「熊野」と言われる地域の東部に位置する東紀州地域の特色を出し、他の地域との相違点、特徴を明確にしていくことを研究テーマとした学問のこと。

● 基本的な考え方

- ① 熊野古道の特徴として念頭におくべきこと
 - ・ 「世界遺産」であること
 - ・ 「道」という特徴的な遺産であること
 - ・ 宗教性や自然景観がおりなす「文化的景観」が評価されているということ
 - ・ 「三重県」という地理的な特性

② 熊野古道センターのあり方

- ・ 熊野古道と人とを結ぶ架け橋
- ・ 情報発信機能のためのしっかりとした学術研究機能が基礎となる
- ・ 世界遺産（紀伊山地の霊場と参詣道）の東の玄関口
- ・ 付帯要件（地域振興・ネットワーク拠点・市民活動）

● 5つの方向性

- ① テーマは道。そこから自然・人・信仰に展開
熊野古道は世界で二つ目の「道」の世界遺産である。
日本独特の宗教観や紀伊山地の特徴ある自然が融合してできた文化的景観が特徴である。
- ② みんなで作り上げる活動するセンター
地域住民・事業者などと協働で作上げ運営していく。
施設（ハード）本位ではなく、運用・運営（ソフト）の視点を重視して作り上げる。
- ③ 成長していくセンター
エンドユーザー（ビジターや運営する人たち）のニーズに合わせられるフレキシブルな施設運営。
- ④ 古道を説明する手段としてのセンター
メインは「熊野古道」である。現地ではわからないことや、プラスアルファの知識を習得するための施設。
- ⑤ 学術性と経済性の共存
学術的なものをベースに、観光サービスや地域振興を視野に入れた施設。

● 機能計画の考え方（3つの機能）

- ① 情報発信機能
全ての来訪者・利用者をあたたかく迎え、安らぎ・知り・交流でき、古道や東紀州地域を紹介する総合窓口とする。また、センター全体の管理、運営本部として機能する。
- ② 研究保存機能
世界遺産としての熊野古道を周知し、研究・学習・研修・展示を行い、古道全域の保護・保全・継承を行う。

③ 交流機能

古道に関する様々な活動団体の支援や活動の場として設定し、研修・会議・交流を行う。また東紀州地域の生活文化等の参加体験機能も合わせ持つ。

●施設計画の考え方

① 古道域景観から施設イメージを創出する

- ・ 古道景観と施設の調和。
- ・ 建物だけ存在するのではなく、回りの景観も含め調和存在する。
- ・ 古道域（紀伊長島～紀宝町（玉城～鵜殿））の海山といった自然景観を把握し、その中で歴史を重ね、生活文化を育み継承してきた生活に関する様々なエレメント（家屋・石垣・集落・田畑・生活道具等、海や山にかかわる歴史的・文化的なもの）、また時代の移り変わりのなかでの集落、町並み、古道景観等を理解し施設イメージに反映させる。

② 地域資源を施設に生かす

- ・ 海、山の自然のなかで育まれた木材や石材等の利用。具体的には木材であれば、木・皮・株・炭・枝等すべて利用。また石材では、切石や自然石、御浜石等を利用する。
- ・ さらに、広くやわらかく考えて、木々や生物を育てている土や水、空気や光、風を取り入れることもできる。
- ・ 古道全域において、これまで使われてきた家屋を構成している部材や生活文化に関する様々なものの利用。

③ 自然環境への十分な対応

- ・ 施設計画地や古道全域での四季の気象条件を把握し、それに応じた施設の対応。（雨・風・塩害・水害＜特に台風時＞）
- ・ 現在想定される（予測される）地震や津波等への対応。
- ・ 四季の自然環境をうまく利用することにより、様々な面での機械エネルギーを自然エネルギーに移行する対応。
- ・ 機械エネルギー関係による閉鎖的施設でなく、自然環境（気候）をうまく利用した開放・閉鎖が可能な施設計画。

④ 様々な面で古道を感じさせる施設

- ・ 古道全域での建物、生活道具、佇まい、石畳、地面、土間、軒下、溝、堀等、そしてその回りの自然景観を構成している様々なエレメント（各構成部分）をうまく利用する。
- ・ 古道域で生活してきた人、古道域を旅する人の、雰囲気やにおいを感じさせる空間の計画。

⑤ 安全でユニバーサルな施設

- ・ 駐車場から建物へ、そして建物の中の各スペースへ移動または利用するにあたり、例えば段差のない床面、素材としての安全性等、空間全体のなかでの利用者（子どもから高齢者、不自由な方等）全てに対して使いやすく、安全性を高める。
- ・ 建築本体の構成部（空間）はもちろん、設備に関するもの、建具や造作家具、また備品にいたるまで、全ての安全性を高める。

- ・ 挨拶や人との交流等、ソフト面での交流しやすいまた管理しやすいレイアウト計画。

⑥ みんなでづくり、継承していく施設

- ・ 今回の施設は古道センターとして情報、研究、保存、交流、やすらぎ等、さまざまな機能を有する。完成後は、常に新鮮な、より深い情報や、地域とビジターの交流等、柔軟な対応が必要であり、したがって、センターの運営も含め、県、市町村、地域全体が一体となり協働していくことが大切である。
- ・ つくり、継承していくものとして、展示に関するもの、古道や熊野学の研究、地域物産の紹介、語り部や各古道域でもてなしをしていただく多くの人々が会話のなかで継承していくものなどもあり、幅広い意味での拠点施設と言える。

⑦ 質が高く集客力のある施設の創造

- ・ 建設計画地は自然気象（雨・風・湿度・塩害等）が特異なところであり、建物本体の耐久性や持続性を高めるための建築素材の選択や、本物志向（無垢材や自然素材等）で進める。
- ・ また建物の存在価値や、古道域・自然景観との調和等も、ビジターや地域住民に与える感覚として質が問われる。
- ・ 建物自体の集客、展示に関する集客、交流・体験による集客等、ハードとソフト面の両面より施設を創りあげることが重要である。

●施設等の仕様計画の考え方

① エコロジー性

- ・ 古道は単なる道でなく、様々な思いを持って旅する人のもの、その旅人をあたたかくむかえる住民のもの、それぞれの地域に住む人たちの生活の場、人だけでない生物の住処でもあり、木々植物や川、土、岩等、自然界全体で成り立っている。このことが建物にもあてはまる事であり、そうした建物でなければならない。
- ・ まさに、人と自然が一体になりうる空間が必要。

② メンテナンス性

- ・ 地域材、地域資源はその地域の様々な環境に耐え、育ち、存在しており、地域を知りついているものである。その素材をより多く使うことが、地域に調和し、持続、耐久性のある施設になると考える。
- ・ 同時にその使い方や様々な技術・手法を用いることで、より耐久性を増すべく計画すべきである。
- ・ また施設の管理は、外部、内部ともに容易であり、メンテナンス費用が少ない建物とする。
- ・ 自然環境（光・風・木陰・温度・湿度等）をうまく施設内に取り入れ、季節（1年）を通して考えておくことが大切です。

③ エコノミー性

- ・ イニシャルコスト、ランニングコストとも、できるかぎり経済的（ローコスト）にし、素材等施設の建築部材は地域性重視とする。

- ・ 管理・運営を考え、余分な面積 (必要以上の面積) や過度な意匠 (装飾) は求めない。

●土地全体の使い方について

① 平地等の用途

建造物は平地へ建設 (駐車場含む)

地域振興ゾーンの確保

屋外施設について

- ・ 現状の地形をできるかぎり利用することを基本とするが、今後具体的に進める上で、造成が必要な箇所は進める。
- ・ 公道から建物までのアプローチ (誘道) は、なだらかな道路アクセスを計画し、木陰等自然環境整備が必要である。
- ・ 地域振興ゾーンは現在、地域主導で進めていく予定であり、現段階では確定していない。2,000m²程度のスペースの確保と、確定するまでのこのスペース利用を考えること。
- ・ 屋外施設は建物、駐車場、地域振興、アプローチ等のスペースを除いた残地の中で、憩いの森を計画し、その中に朝市スペースや広場、WC、休憩所等、屋外においてビジターの受入れサービスや、地域住民との交流が出来るように考える。

② 体験施設について (古道センター内部・外部)

- ・ 古道域における生活文化や農業、林業、水産業の様々な技術を紹介し体験することで、来訪者 (ビジター) に、この地域の歴史・文化・生活をより深く理解していただくための施設として考える。
- ・ 来訪者のセンターへの滞留時間や体験メニューによる必要時間等、運営の仕方も十分考慮する必要がある。
- ・ 現在体験メニューとしてWS等での提案は、炭焼き、木工、草木染、干物づくり等があがっている。今後、メニュー、運営等で検討する必要があるが、またセンター施設内部で行うもの、センター外周辺で行うもの、地域に出て体験するものもあると考えられる。地域住民主導の活動であり、様々な分野でのネットワーク体制を作る必要があると考える。

③ 後背地の用途 (造成設計)

自然林をそのまま残す方向で

スローライフを意識したもの (スローな公共事業) で

庭園管理より森林管理の考え方で

散策道の様態 (擬似古道の可否)

- ・ 後背地は自然林が大半を占め、人工林は2～3割程度であり、山や谷を含めそのまま残し、活用することを基本とする。様々な樹種や鳥類等の生きものも多く、谷川には神秘的な滝もあり、自然の癒し空間としてビジターを受け入れるよう計画する。
- ・ 後背地の活用整備は官民が一体となり、地域住民主導によるスローライフを基本とした、無駄のない持続性のある事業として行う。
- ・ 特に自然林はほっておいて良いものではなく、下草や低木を刈り、風通しのよい林にすべきであり、人工林は徐々に自然に移行させる。また、全体自然域は庭園的管理ではなく森林管理体制を取り、ローコストで自然保護を主として管理する。

- ・ 自然域内の散策道 (尾根筋・谷筋等) については、階段はできる限り無くし、なだらかな地道として人が歩ける程度の整備とする。また散策道は古道イメージでなく、あくまで、自然域の小径として計画する。

●運営計画の作成について

本資料のとりまとめにおいて、「みんなで作り上げる、活動するセンター」という基本概念に基づき、運営面における機能要件を明確にした上で建築設計に反映させることが必要である。

そのためには、熊野古道センターの運営計画を本構想作成からオープンまでの期間に、住民や実際の運営母体等と協働でシミュレーションするなどして、とりまとめることとする。

ただし、担い手の決定や人事面の与件から、設計時から一貫した担当者を選任して運営計画をとりまとめることは不可能なところもあるため、建築設計においては、オープン後にフレキシブルな対応が取れるよう計画する。

<取りまとめる事項>

① 3つの機能の相互関連性とその体制

研究保存機能がセンター機能の基礎的な要素であり、この機能がセンターのベースになる。特に、情報発信機能が全体のプロデュース機能を持ち、交流機能をあわせた3つの機能の調整役となる。

このことを実現できる体制作りをめざした、総合的な運営計画とする。

② 基本的な運営体制について

建物の維持管理については県が負担するが、運営においては市民や事業者との協働を行いたいため、そのための行政組織の対応を明確にすることや、市民活動等での担い手をできるかぎり明確にした計画を作成する。

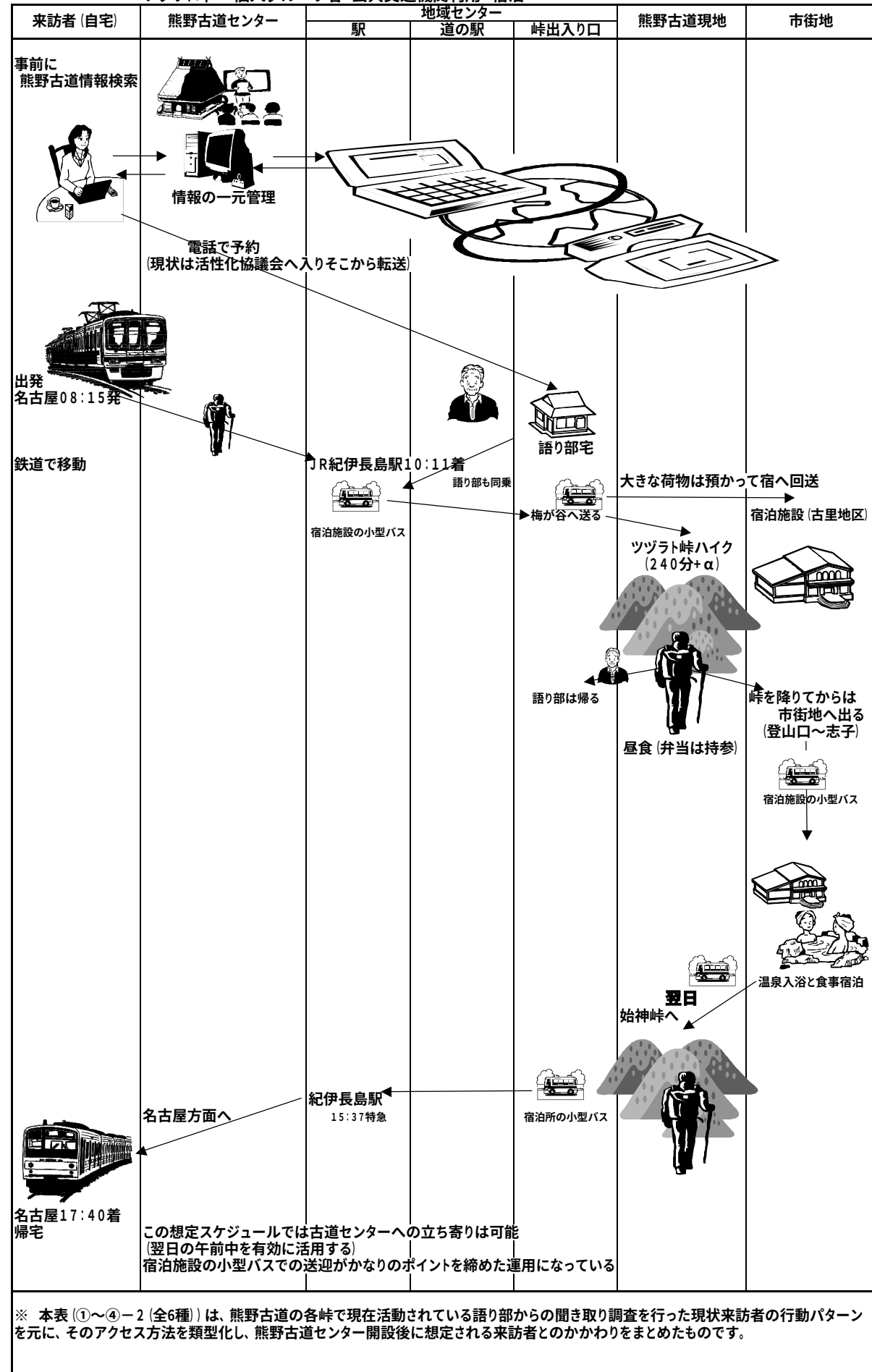
また、事業として民間へ委託する部分があれば、その内容と方針を明確にする。

③ 運営メニュー

エンドユーザーへのサービスメニューをとりまとめる。

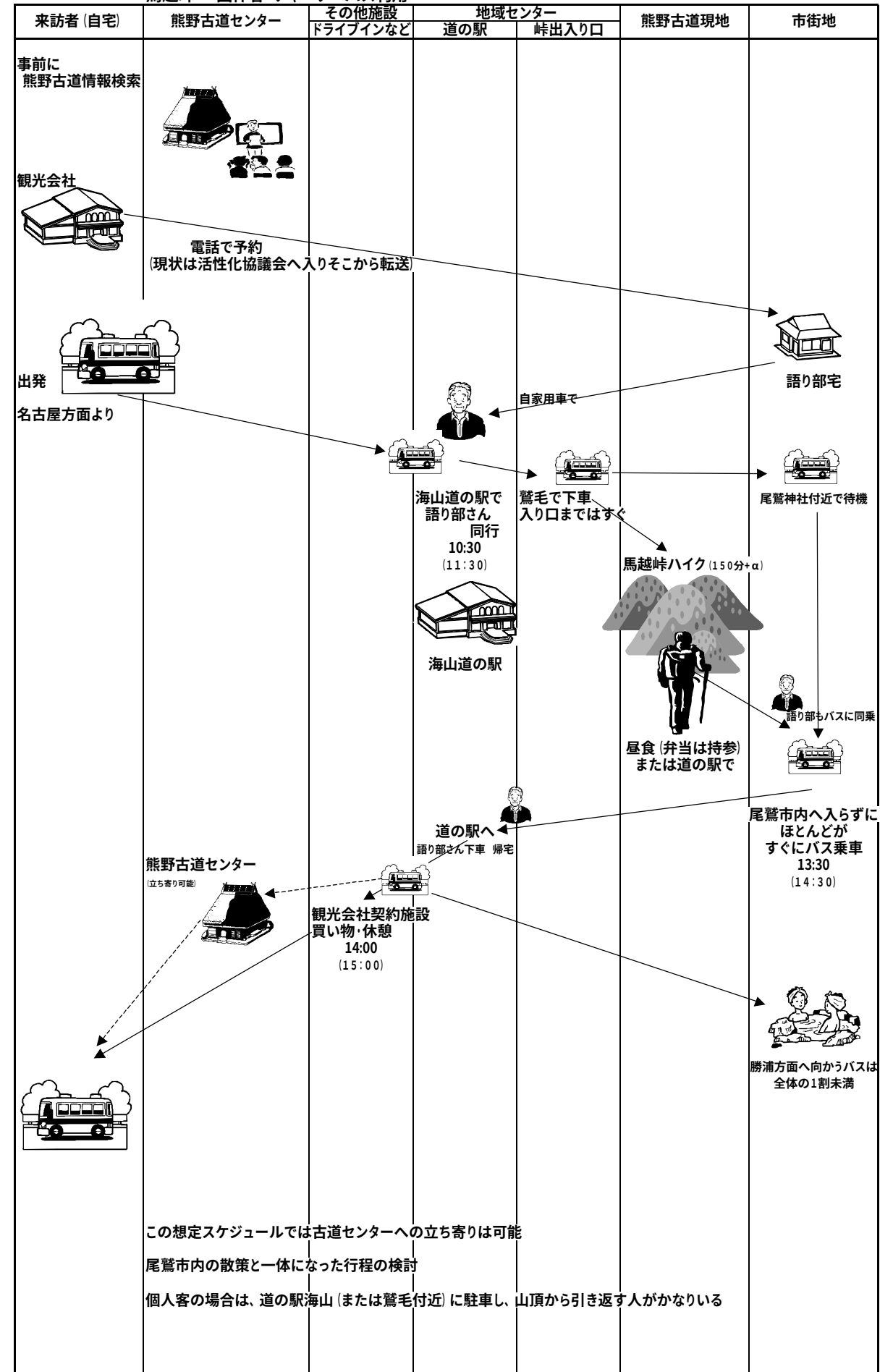
想定アクセスによる行動類型

① 宿泊施設を核とするエリア
ツツラト峠 個人グループ客・公共交通機関利用 宿泊



想定アクセスによる行動類型

②-1 古道センターを核とするエリア
馬越峠 団体客・チャーターバス利用



②-2 古道センターを核とするエリア
八鬼山越え 団体客・チャーターバス利用

この想定スケジュールでは古道センターへの立ち寄り是不可能
ただし、センターとは至近なので一体となった運営メニューを作ることで対応は可能
(到着時間を早める工夫が必要)
長時間かかる峠であり、途中で脱落する人への対応も必要(林道での待機搬出)

③ JRローカル線エリア(宿泊施設を核とするエリア)
荷坂峠 単独個人客・公共交通機関利用

この想定スケジュールでは古道センターへの立ち寄りとは不可能
 (古道センターの果たす役割は、事前の正確で詳細な情報発信と、予約受付など)
 梅ヶ谷駅から峠入り口までの行程に工夫の余地あり(地元業者との連携で小型バス運行など)
 自家用車客についても10:30集合までの行程に参加することが可能とする(梅ヶ谷駅周辺の駐車場整備)

便数の限られた列車時刻にあわせて一日の行動パターンを組むことにより来訪者管理(?)を行いやすくす
 (荷坂峠・ツツツ峠・一石/熊谷・始神峠など峠の出入り口がJR線の駅に近い峠)

④ー1 ドライブ周遊エリア
横垣峠 団体客・チャーターバス利用

この想定スケジュールでは古道センターへの立ち寄り是不可能
ただし、観光会社は契約施設へは立ち寄っているため、組み込めれば可能
(到着時間を早める工夫が必要)

④ー２ ドライブ周遊エリア
風伝峠 単独個人客・自家用車利用

この想定スケジュールでは古道センターへの立ち寄りはかなり困難
(PRと魅力作り)